

高橋哲雄著

ミステリーの社会学

近代的「気晴らし」の条件



中公新書

940

江苏工业学院图书馆
藏书章

高橋哲雄著

ミステリーの社会学

近代的「気晴らし」の条件

中央公論社刊

高橋哲雄（たかはし・てつお）

1931年（昭和6年），神戸市に生れる。

1954年，京都大学経済学部卒業。

現在，甲南大学経済学部教授。

著書『イギリス鉄鋼独占の研究』

（ミネルヴァ書房）

『大恐慌前後』（編著・同文館）

『二つの大聖堂のある町』（筑摩書房）

『産業論序説』（実教出版）

訳書『イギリスとドイツ』

ヘルマン・レヴィ著（未来社）

『異端の経済学者の告白・ホブスン自伝』

J・A・ホブスン著（新評論）

ミステリーの社会学

中公新書 940

© 1989年

検印廃止

1989年9月15日印刷

1989年9月25日発行

著者 高橋哲雄

発行者 嶋中鵬二

本文印刷 三晃印刷
カバー印刷 大熊整美堂
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7
振替東京 2-34

ISBN4-12-100940-1

はじめに

「ミステリーの社会学」というテーマで何か書くことができるのではないかと考えるようになって何年かになる。

ミステリー（探偵小説、または推理小説と、さしあたり読み替えてもらっていい）については、洋の東西を問わずこれまでもいぶん多くのことが語られてきたし、今も語られている。そのかなりの部分はトリックやプロットの分類・集成とか登場人物の類型分析、周辺考証など、ミステリーの楽しみをめぐる好事家のおしゃべりで占められている。作品論や作家論、ミステリー史ももちろん少なくない。近年では記号論や論理学史、心理学などを使って、作品を解説しようという試みも現われるようになった。「ミステリー評論からミステリー学へ」とまでいえば少し大げさかもしれないが、そうした傾向もそこにはよみとれないではない。

しかし、私のように社会科学をやっているものにとつてまず気になる疑問——たとえば、なぜ本格派ミステリーはイギリスで断然他国を引き離す発達をとげたのか、アメリカではハードボイ

ルド、日本では戦前は「変格」もの、戦後は「社会派」推理小説が発達したのはどういう事情によるのか、またイギリスの隣国であり、同じく偉大な文学生産国であるドイツやアイルランドが、ミステリー生産についてはまったく不毛の状態に終始したのはどうしてなのだろうか——といった問題を正面から取り上げた議論は聞いたことがないように思う。

またそれと関連して、現実の犯罪傾向とミステリーのそれとの間にはどんな対応関係があるのか、警察や裁判のありかたには国ごとに大きなちがいがあがるが、それはミステリーにも何らかのかたちで反映されているのだろうか、ウェーバーやトニーが宗教と資本主義の発展の間であきらかにしたような関係がミステリーとの間についてもみとめられるだろうか——そうした問題諸領域についても、これまではせいぜいヘイクラフトの「民主主義仮説」（後出）があるくらいのものであった。

さらに、ミステリーを書いたり愛読したりする人たちはどういう社会層に属しているのか、女性の果たす役割は一般小説のばあいとどうちがうのか、そのさい本の値段とか図書館、貸本屋といった制度的要因はどうからんでくるのか、といった読者層を中心とした角度からのミステリー論の試みもあまりみかけないし、あっても不十分なものであることが多い。海外ではいくつ興味深い仕事も出ているけれど（ウーズビ、ワトスン、マンデルなど——後出）、端的に言って、それを翻訳しさえすれば、苦勞してこんな本を書いたりしなくてすむのにと思わせるほどの作品は、ま

だ現われていない。

このように半ば置き去りにされた「ミステリーの社会学」の領域に、いわば探偵になったつもりで潜入してみようというのが本書のねらいである。いってみれば、文芸社会学のミステリー・ジャンルへの応用篇というところか。社会科学の眼でミステリーの歴史や可能性を読み、ミステリーの成長と変質のなかに社会の仕組みや動きを探ろうというわけだ。そんな大それた試みがうまく行くかは正直いって自信があるわけではないが、ただ、そうしたあたらしい視角を設定することで、これまで気付かなかったものがみえてきて、ミステリーを読む楽しさがいっそうゆたかなものになるのではないか、とは思ふ。

探究作業に取りかかるに先立って、とりあえず確認しておきたいのは、やや抽象的な言いかたになるが、ミステリーは一般小説に比べると、特定の時代、社会、特定の階級ないし集団との結びつきがはるかにつよいという点で、ユニークな社会的性格をもつ文学だということである。そのへんから話をはじめることにはしたい。

*

語学がうまくなる方法のひとつとして、昔はよくポルノグラフィ（好色本）か探偵小説を読めといわれたものである。

ポルノの方は私も勧められたことがある。旧制高校に入って最初のドイツ語の時間のことで、黒板に大きく書かれた PORNOGRAPHY という単語も知らなかった田舎中学出の少年は、まずドギモを抜かれ、次にはじめて「大人扱い」されたうれしさがこみ上げてきたことを憶えている。幸か不幸か、世間一般のポルノ度が桁外れに高くなり、どぎついものがどこでも簡単に読めるようになった現在では、もう原書でポルノを読めなどと無駄なことを勧めてくれる先生はいなくなった。かつての「教育的」効果が期待できそうもないからだ。だが、探偵小説の方はいまでも教室で読まれている。高校の副読本に使われたり、大学でも受講要項をのぞくと、たいいてい一人か二人はミステリーをテキストに使う先生がいるようだ。

ただ昔でもポルノと探偵小説とは読みかたが完全に同じではなく、「推薦」の意味にもちがいがあったように思う。どちらも人を夢中にさせる力がある点では変りないけれど、ポルノのばあい「不要な」箇所はどしどし飛ばして読めばよいが、探偵小説ではそれをやるとあとがわからなくなるというちがいがあった。図式的に言えば、ポルノは速読向き、ミステリーは精読向きということだったろう。

小説を読むおもしろさは、「われを忘れる」か「身につまされる」かのどちらか、あるいは両方にあるといったのは平野謙だった（『文学的リアリティについて』ほか）。「われを忘れる」方はさしずめデュマの『モンテ・クリスト伯』のような大ロマンに代表され、「身につまされる」方は、

たとえば日本の私小説や世話物に代表されるということになろうか。文学上の古典といわれるような作品になると、両方のおもしろさが満たされるといった話だった。

ミステリーはもちろん「われを忘れ」させるタイプの小説の一方の雄である。ミステリーを読んで身につまされたなんて話はあまり聞いたことがない。しかし、『モンテ・クリスト伯』と比較してみると、一口に「われを忘れる」といってもいろいろあるのではないかという気がする。早い話が、『モンテ・クリスト伯』だとヒーロー、ヒロインの運命が気になって、ページを繰るのももどかしく、飛ばし読みをすることになりかねない。その点ではポルノに似ている。しかし、ミステリーのばあい、それをやると、伏線や手がかりを読み落してしまって、ゲームに参加できなくなるおそれがある。つまり、われを忘れるのはいいが、忘れっぱなしではいけない、飛ばし読みをしてはいけないタイプの小説なのである。^{*}だから、本筋の謎解きと無関係な脇筋を錯綜させることは歓迎されない。ヴァン・ダインの有名な「探偵小説作法二十則」で「恋愛を持ち込むな」とされているのも、そういう意味からなのである。

^{*}もともと読みかたは人さまざまで、哲学者のバートランド・ラッセルは晩年一日一冊はミステリーを読んでいたというが、そのスピードたるや一時間たらずの車中で四冊は読みあげてしまうほどのものだったらしい（アラン・ウッド、碧海純一訳『バートランド・ラッセル』（木鐸社）、および佐伯彰一『自伝の世紀』（講談社））。

考えてみれば、これはかなり奇妙な文学ジャンルである。「われを忘れる」にせよ「身につま

される」にせよ、そこには作品世界への陶醉があるはずなのだが、ミステリーのばあいは、歴史学のテキスト文書を読むように、文中に隠された意味を解説しようという醒めた意識が、陶醉と同時に働いていなければならない。語学の先生が今も昔もミステリーを勧めるのは、それが「われを忘れ」させる作用をもつとともに、飛ばし読みの誘惑に耐えて、緻密なテキストの解説を必要とするタイプの小説だというところにあるにちがいない。ミステリーが知識人の間で広く愛好され、「教授の文学」と呼ばれたりするのは、そうした特徴に由来するところがあるだろう。

すでにおわかりと思うが、いま述べているのは、ミステリー属のなかでも、古典的な探偵小説とか本格推理小説、あるいはふつうにミステリーと呼ばれている種類のものについてである（本書でのこれら用語の使い分けについては「終章」で記す）。このタイプの小説はあきらかに「近代」の産物である。十九世紀に生まれ、二十世紀に成熟し、内容・形式ともに近代以前にはみられない、あるあたらしさがあつた。早くいえば、人の死を謎解きゲーム化して、人びとをその解説作業に熱中させ、挙句の果てはそれを学校教育の素材にまで使おうというのだから、その「罰当たり」ぶりは、まさに神の死んだ時代にふさわしいわけだ。

それに比べると、同じミステリー属といっても、犯罪小説や犯罪実録、サスペンス、冒険小説、ホラーなどのジャンルには、多分に近代以前の、たとえば十七、八世紀のゴシック・ロマンやピカレスク・ロマン（悪漢小説）の再現の匂いをつよく感じさせられる。本格派ミステリーはこれら

眷属の間に生まれ落ちながら、血を分けた同胞たちとはあきらかに異質の時代精神を養分として育った。ミステリー仲間のように、かたちは変わっても歴史のある段階で繰返し現われるというタイプの文学ではなく、また詩や物語のように、どんな時代、どんな場所、どんな階級の間にも普遍的に存在するメジャー芸術でもない。近代になってはじめて生まれ、アングロサクソン文化圏に偏在し、作り手（作家）も受け手（読者）も中産階級のなかで賄ってきたという特徴をもつ。いわばすみか^カをえらぶ、というか、氣むずかしい棲息条件をもつ文学ジャンルなのだ。

そのことは一般小説と比べてもあきらかである。ミステリーは、たとえば、「逃避文学」とか「氣晴らしの読物」といわれるけれど、どんな国の、どんな階級の人でもたやすく読め、気軽に楽しめる性質の小説ではない。それを楽しむことができるのは、経済的・時間的・精神的に多少なりとゆとりがあり、いくらかは教育ある人たちなのであって、近代社会に属しているすべての人たちがそうした条件をクリアできるわけではない。少なくとも大衆化時代が本格的に到来するまでは。

それに対して、一般小説には意外に、ミステリーにはない受け皿の広さがある。人の世の悩み苦しみに共感する「身につまされる」おもしろさもあれば、ミステリーと同じ「われを忘れる」おもしろさにしても、ひまつぶしというだけでなく、この世の労苦を忘れる役割も果たしてくれる。労働者階級の人たちにも親しまれるのはそのためである。ミステリー王国のイギリスでも、

一般小説の分野ではロレンスをはじめとしてアラン・シリトー、ジョン・ブレイン、デイヴィッド・ストーリー、アーノルド・ウェスカーと、数多くの労働者階級出身の作家を出しているのに、ミステリーの分野では、少なくとも名前の通った労働者作家がまったく生まれていないのは、そういう事情を抜きにしては語れないだろう。

現在は犯罪小説、犯罪ノン・フィクション、ホラー、冒険・スパイ小説などのジャンルが大繁昌で、古典的な謎解き小説には昔日の面影はない。しかし、本書では、そうした広義のミステリー属も視野に入れて考察するが、あえてその古典的なミステリーを探究の出発点にすえたいと考えている。いまみてきたような、他のジャンルにはみられない社会とのユニークな結びつきがあるからだ。それをひとつのよりどころに、以下ではミステリーの成長と変質の内容と由来を社会科学の諸領域のなかに探究しようということになる。ミステリー史の社会科学的解読作業の試みといってもよい。逆にミステリーという特異な文学のなかに、近現代社会という巨大な謎を解読する鍵がみつければとも思うが、そこまでいえば多分あまりに誇大な前宣伝ということになるんじゃない。

目次

はじめに i

序章	ルールブックの文学		3
----	-----------	-------	---

——ミステリーの発生論的考察

ミステリーとスポーツ 時間と場所の一致 ゲ
ームとしてのミステリー クラブの文学 アマ
チュアリズム ミステリーのルール フェア・
プレイの意味

第一部	ミステリーの素材世界		33
-----	------------	-------	----

犯罪とミステリー

第一章	ミステリーの舞台装置		39
-----	------------	-------	----

都市と犯罪、ミステリー 都市犯罪の虚構性
ミステリーは邸町で？ スパイ小説のばあい
なぜ邸町が？ 田舎の犯罪 田舎のこわざ——

第二部

タイプ1 田舎のこわさ——タイプ2 「メイ
ヘム・パーヴァ」の世界 田舎屋敷ものとその意
味

第二章 犯罪捜査の虚実 71

「ワトーの羊飼ひ」 科学と犯罪、ミステリー
「組織」の問題 名探偵には向かない犯罪 誘
拐ビジネスの時代

イデオロギー 91

第一章 カタルシスの諸相 92

カタルシスとは 読者のためのカタルシス 倫
理のカタルシス 倫理のカタルシスの変質 知
的カタルシス 知的・倫理的シニズムの時代
ハッピー・エンドの終焉

第二章 エートス 112

デモクラシー説 裁判への市民参加 日本の陪
審制 陪審制とミステリー 闘争のルール

第三部 読む人、読ませる人

圧制への抵抗 法と正義のきしみ 手ごわい証人たち 教会の役割 教会とミステリー イギリスのばあい 国教会の怪物性 遊びへの寛容 宗教、犯罪、ミステリー アメリカの作家たち 仏教——日本の国教会 ミステリー・ギャップ——その原因 儒教の役割 朗読からの解放

第一章 読む人

ホームズから「黄金時代」へ 「ブルジョア化」問題 「黄金時代」の日本 韓国ミステリー起源小考 余暇百態 旅行・通勤の友 女性と余暇 余暇の条件・召使い 子育てからの解放 家庭への拘禁 拘禁への代償 読むものを書く? 経済的ゆとり 文学からの逃避 女性 探偵像の変遷 影の階級・召使いの問題 召使い像の変遷

第二章 読ませる人 211

貸本屋 ペーパーバック革命 ミステリーは大

衆化したか？ 借りるか買うか 公共図書館の

役割 大陸、日本の図書館

終章 ものぐさな「大団円」 233

あきらめた「解決篇」 「探偵小説」と「推理小

説」 「ミステリ」と「ミステリー」 「社会学」

か「経済学」か

おわりに
252

ミステリーの社会学

——近代的「気晴らし」の条件

